

高興野幕古墳からみた5世紀の対外交渉

権 宅 章

I. 序文

II. 墳墓と主体部の形式

III. 副葬品の状況

IV. 出土遺物についての検討

V. 5世紀における倭の情勢と北東アジアの沿岸航路

VI. 結論

要 旨 韓半島西南海岸の沿岸一帯から、野幕古墳をはじめとする倭系遺物の出土例や倭系葬法が採用された古墳の調査事例が増加しつつある。これまで倭系古墳の被葬者については、在地首長説、倭人傭兵説、倭系百濟官僚説など諸説が提起されてきた。しかし、野幕古墳のように沿岸地域で発見される倭系古墳は、内陸を拠点とする地域で発見される倭系古墳とは異なる背景や性格をもつものと判断される。

釜山から新安郡に至る沿岸一帯で確認された倭系古墳は14基である。その中で、5世紀前葉から中葉の革綴式甲冑が出土したのは、金海の栗下B-1号墳、高興の雁洞古墳、野幕古墳、海南の外島古墳、新安のペノリ古墳など5ヶ所である。高興の雁洞古墳以外はすべてが5世紀前葉に築造されており、主体部も北部九州の石棺系竪穴式石室と類似している。特に、主体部の副葬品の状況全体が明確になった野幕古墳とペノリ古墳は、鏡や甲冑などの副葬品の構成と配置がほぼ同じである。

5世紀に畿内を中心とした倭王権は、鉄、馬、金工品などを日本列島各地の地域勢力へ分配・供給し支配権を強化したとされている。この供給拡大により、それまでの韓半島南部に依存していた供給地を韓半島の西南部と中西部に広げ、また、それにともない安全な航路の開拓が必要となったと考えられる。そのため、航海が最も困難な麗水半島から新安郡に至るところに位置する高興・海南・新安地域に交易船を寄港させ、航路の案内をする倭人を派遣していたと推定される。その被葬者については、先述した主体部の系譜が九州地域と関わりがあること、帯金式甲冑の生産と配布が倭王権において一元的におこなわれていたことなどから、九州を出自に持ち、倭王権の影響下にあった人物と想定される。

キーワード 倭系古墳 沿岸航路 三角板革綴短甲 衝角付冑

I. 序文

韓半島西南海岸の沿岸一帯から、野幕古墳をはじめとする倭系遺物の出土例や倭系葬法が採用された古墳の調査事例が増加しつつある。今まで倭系古墳¹の被葬者については、在地首長説、倭人傭兵説、倭系百済官僚説など諸説が提起されてきた。しかし、野幕古墳のように沿岸地域で発見される倭系古墳は、内陸を拠点とする地域で発見される倭系古墳とは異なる背景や性格をもつものと判断される。

本稿では、野幕古墳にみられる葬法や出土遺物の系譜などを検討し、沿岸航路に関わる当時の北東アジアの情勢を把握するとともに、野幕古墳をはじめとする倭系古墳が沿岸一帯に登場した背景を検討する。その過程で、古墳被葬者の出自や在地勢力との関係も把握できると考えられる。

II. 墳墓と主体部の形式

野幕古墳は直径24m前後の円墳で、墳丘表面の一部に葺石が残る²（第1図）。主体部は墳丘の上部に位置し、墳丘の盛土と併行して築造されたと推定される。主体部の構造は石槨であるが、壁体の石材は内側の木槨を支えとして積み上げられている。すなわち、まず木槨を設置し、その後、その外側に壁体の石材を積んで構築したと考えられる。石槨には蓋石など上部を閉鎖する施設は確認されていないが、木槨には木蓋があったと推定される³。そして、壁体の石材の外側に石を裏込めして補強する点もこの古墳の特徴である。石槨の内部は、長さ310cm、幅73～86cm、深さ45cmで、比較的狭くて浅い構造になっている。

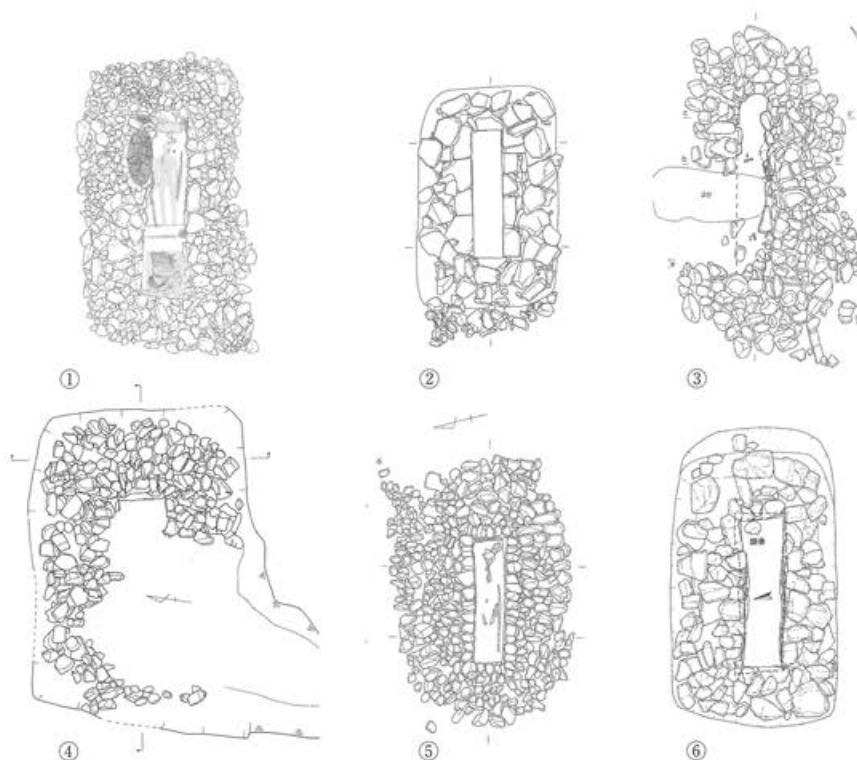
このように墳丘表面に葺石が認められることや主体部の形式は、韓国よりも日本にその類例が多い。また、後述する出土遺物についても日本に類例が認められる。

石槨の壁体の外側に比較的幅広く裏込め石（補強石）が詰められていること、狭くて浅い内部構造、木槨の採用などの特徴をもつ野幕古墳の類例としては、5世紀に北部九州地域で盛行した石棺系竪穴式石室をあげることができる⁴。このような構造は、金海栗下B



第1図 野幕古墳の墳丘調査状況

-1号墳、馬山鎮北大坪里M1号墳、新安ベノリ3号墳などでも確認されており、基本的な形式は伽耶の竪穴式石槨に似ているが、狭くて浅い内部構造、出土遺物、または、墳丘の葺石などを考えると北部九州の石棺系竪穴式石室と比較するのが妥当であろう。



第2図 主体部の比較

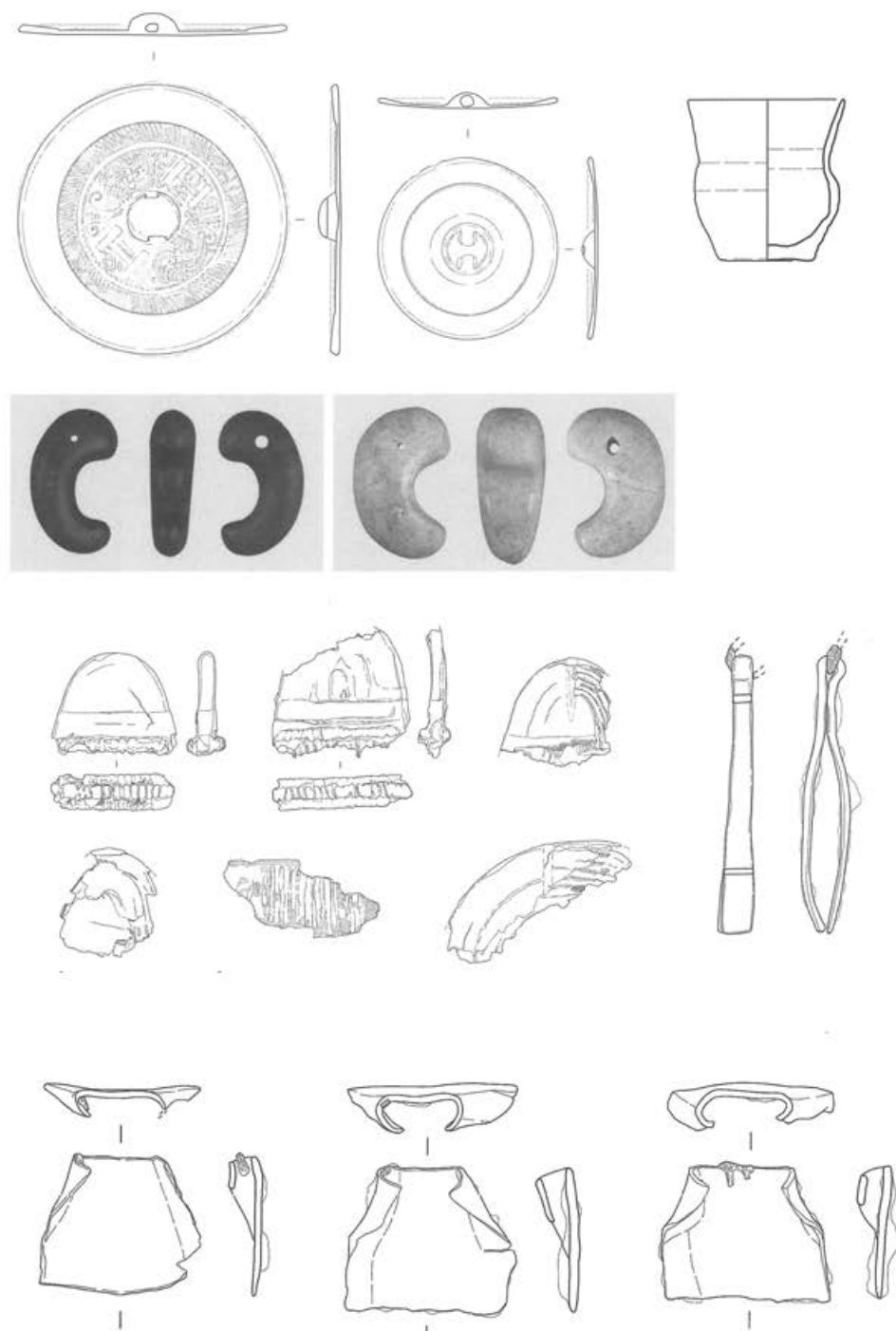
①高興 野幕古墳 ②金海 栗下B-1号墳 ③馬山 大坪里M1号墳 ④福岡県 笹原古墳 ⑤福岡県 七夕池古墳
⑥福岡県 柿原古墳群C-4号墳

さらに詳細に検討すると、その構造や規模、蓋石がない点などは福岡県笹原古墳⁵を、内部に木槨を設置して壁石を築く方法などは福岡県七夕池古墳に類例を求めることができる(第2図)。

Ⅲ．副葬品の状況

野幕古墳からは、甲冑・鉄鏃・鉄矛などの武器・武具類、鉄鋤・鉄鎌・刀子などの農工具類、銅鏡・勾玉・管玉などの装身具類など、250余点の副葬品が出土した(第3図)。出土した位置は、石槨壁体部と石槨外部、木槨内部に分けられ、木槨内部は、さらに被葬者の周辺と被葬者の足元側の副葬空間に分けられる(第4図)。

石槨外側の裏込め石上部からは、鉄鋤・鉄鎌・刀子などの農工具類と鉄矛が出土し、石槨内部である被葬者頭部側の短辺の片隅からは、装飾的な要素が強い鉄鏃が突き立てられた状態で確認された。木槨内部の被葬者周辺からは、頭部側に竖櫛、銅鏡(位至三公鏡)、碧玉製勾玉が、胸と腰の周辺からは管玉が多数確認されており、左右にはそれぞれ剣と刀が配置されていた。ヒスイ製勾玉は石槨内部の堆積土中央で確認されたことから、木槨を



第3図 野幕古墳出土遺物（縮尺不同）

ふさいだ木蓋の上にあったと推定される。また、主体部から出土した唯一の土器である広口小壺は石槨壁体の外縁の上段から出土しており、石槨外側の壁体の縁に置かれていたものと推定される。

被葬者の足元側には三角板革綴短甲・衝角付冑・肩甲・頸甲などの武具類一式と、鉄鏃^{じょうし}、鐮子、刀などが向きを揃えて置かれており、衝角付冑の中からは素文鏡1点が出土した。

IV. 出土遺物についての検討

1. 甲冑

带状の長い鉄板を構造材にして、三角形や長方形などの地板を革紐で綴じるか鉚で留める短甲と冑を帯金式甲冑という。韓国において、この形式の短甲が出土した事例は、5世紀代の古墳から25例ほど報告されている⁶。釜山・金海・

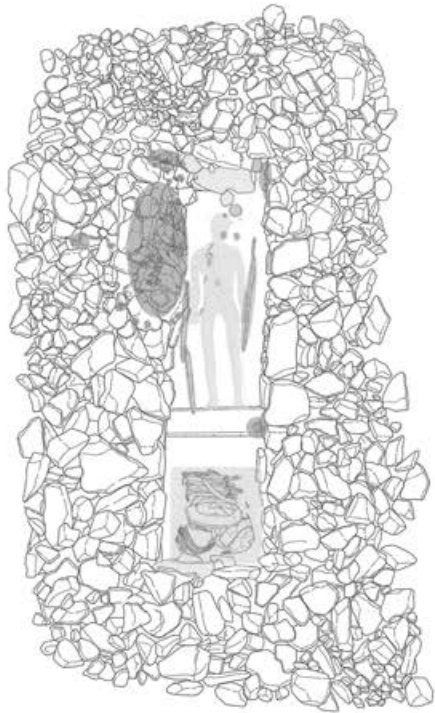
陝川などの伽耶地域、麗水・高興・海南など西南海岸の沿岸一帯、靈岩・長城などの榮山江流域、清州・陰城など錦江流域の百濟地域などで、主に内陸水系沿いの拠点地域と沿岸地域に分布している。

一方、日本では古墳時代中期になると、このような帯金式甲冑の副葬が爆発的に増え、日本全国で570余例⁷が報告されており、その製作技術も段階的に変化していくことが明らかとなっている。

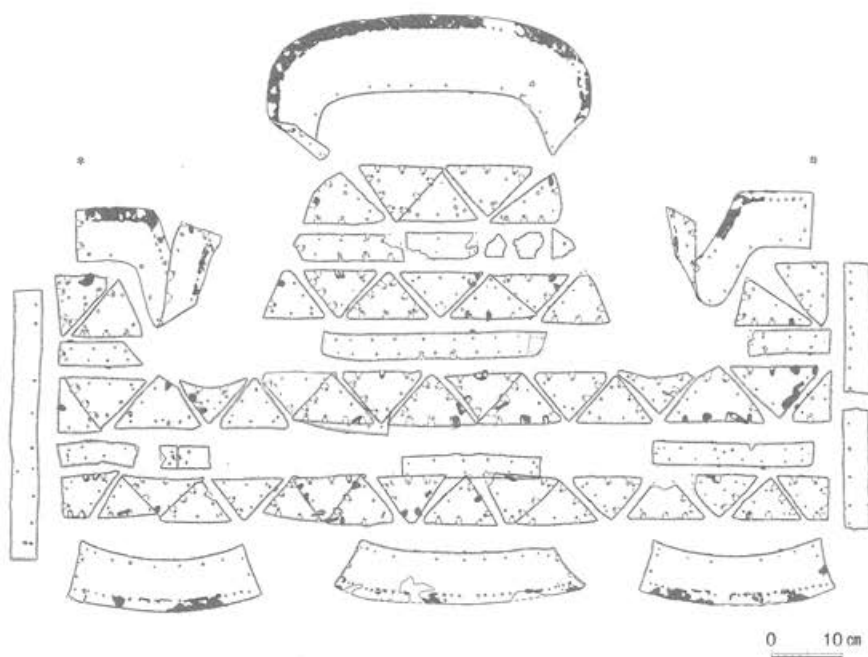
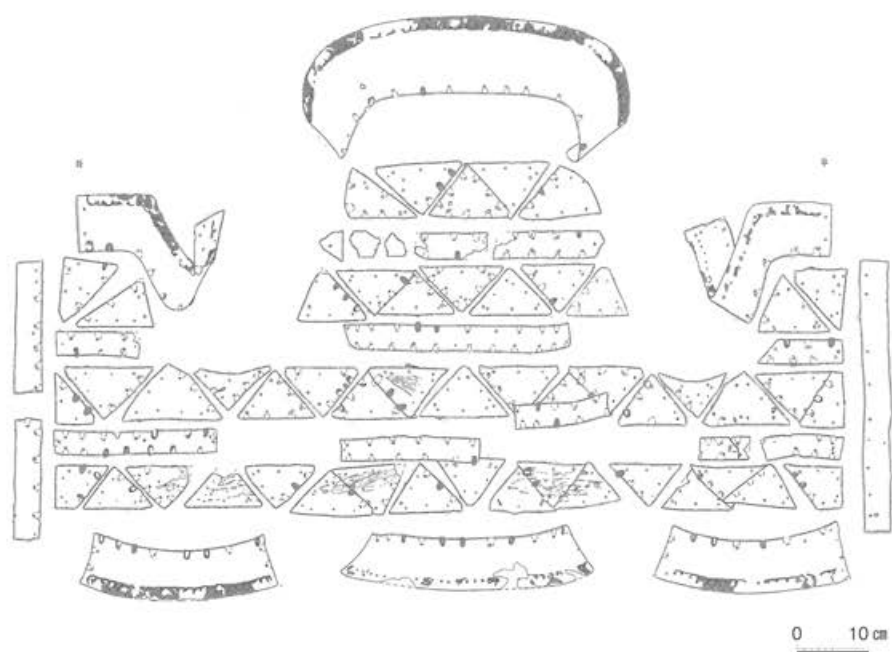
宋桂鉉は、韓半島出土帯金式甲冑の技術的体系が成立した地域を韓半島南部としている⁸が、これまでに出土した数量、初期型式の出現時期、型式の段階的变化などを考慮すれば、日本とみるのが妥当であろう。

日本における帯金式甲冑の成立と変化の概略は次の通りである。古墳時代前期後葉には、帯金を用いない方形板革綴、あるいは堅矧板革綴の構造であったが、中期初頭（4世紀末）になると、三角形や長方形の小さい鉄板を帯金に固定する帯金式甲冑へと変化する。その後、中期末までに日本各地の古墳に副葬される。帯金式甲冑の変化の大枠は、鉄板の連結技法が革綴から鉚留へと変化したことにあるが、鉄板の形態と大きさからもさらに細かい変化の段階が設定できることが指摘されている。

野幕古墳で出土した甲冑は、三角板革綴式である（第5図）。その類例は韓国では10基の



第4図 野幕古墳の副葬品出土状況



第5図 野幕古墳出土短甲（上：外面、下：内面（縮尺不同））

第1表 韓国の三角板革綴短甲の出土状況

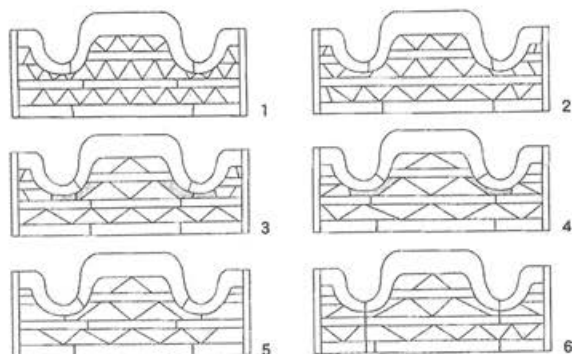
	古墳	短甲	冑及び付属具	主体部	共伴遺物	その他
1	高興 野幕古墳	革綴/A	三角板革綴衝角付冑、 肩甲、頸甲	木槨 (石棺系竪穴式石室)	鳥舌鐵など 倭系鉄鐵	葺石
2	釜山 福泉洞4号墳	革綴/A		石槨	長頸鐵、土器、 鉄矛など	
3	金海 斗谷43号墳	革綴/B	横翅板鉄留眉庇付冑	石槨		
4	金海 栗下B-1号墳	革綴/B		石槨 (石棺系竪穴式石室)	鳥舌鐵など 倭系鉄鐵	(葺石)
5	陝川 玉田68号墳	革綴/B		木槨		
6	咸安 道項里13号墳	革綴/B		木槨		
7	海南 外島1号墳	革綴/B		箱式石棺		
8	新安 ベノリ古墳	革綴/B	(三角板鉄留衝角付冑)	石槨 (石棺系竪穴式石室)	鉄鏡	
9	靈岩 沃野里 方台形古墳 第1号墳	革綴/B		石室	ヒスイ製勾 玉など	
10	坡州 舟月里	革綴/B				地表採集

凡例：短甲のAは三角板の形態が等角（正三角形）、Bは鈍角（二等辺三角形）。（ ）は推定。

古墳から10点、日本では73基の古墳から86点が報告されている⁹（第1表）。

三角板革綴短甲は三角板の形態によって等角系（正三角形）と鈍角系（二等辺三角形）に分類されるが、等角系が早い段階のものとされ、さらに等角系の中でも短甲を構成する三角形地板の数と脇部分の地板の形態によって時期差が認められることが指摘されている¹⁰（第6図）。

野幕古墳の短甲は等角系で、韓国では釜山福泉洞4号墳出土品を含め2点がこれに当たる。等角系は、前胴と後胴が共に7段になる



第6図 三角板革綴短甲の型式と編年

1. 等角系Ⅰ式（大塚越古墳）
2. 等角系Ⅱ式（向山1号墳）
3. 鈍角系Ⅰ式（堂山1号墳）
4. 鈍角系Ⅱ式（長湍西古墳）
5. 鈍角系Ⅲ式（鞍塚古墳）
6. 鈍角系Ⅳ式（ニゴレ古墳）

第2表 韓国と日本の等角系三角板革綴短甲の地板比較

古墳		地板枚数					前胴 地板配置	
		豎上 2 段		長側 1 段	長側 3 段	合計		
		前胴	後胴					
日本	大塚越	4	7	21	17	49	菱形	
	佐野八幡山	4	5	15	17	41	菱形	
	谷内21号	4	5	15	15	39	菱形	
	向山 1 号	4	5	13	14	36	変則	
	井手ノ上	2	5	(13)	(11)	(31)	変則	
韓国	福泉洞 4 号墳	4	5	13	(12)	(34)	菱形	
	野幕古墳	豎上 2 段		豎上 4 段	長側 1 段	長側 3 段	合計	前胴 地板配置
		前胴	後胴	後胴				
		4	5	7				

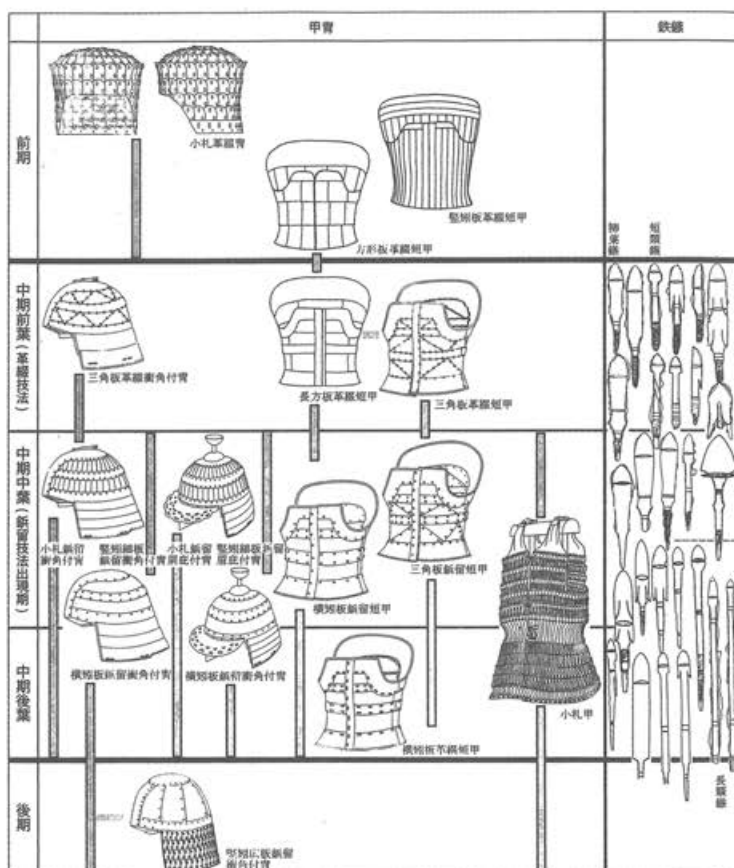
のが一般的であるが、野幕古墳の短甲は前胴が7段で、後胴が9段になっている。また、脇部分の鉄板は、日本の初現期の型式とみられる滋賀県大塚越古墳の短甲より後出の型式で、富山県谷内21号墳の短甲に酷似している（第2表、第7図）。

日本でも等角系の短甲は少なく鈍角系が大部分を占める。等角系短甲については、初現期の型式（等角系Ⅰ式）は古墳時代中期初頭（4世紀末）に、野幕古墳と類似する富山県谷内21号墳や福井県向山1号墳の型式（等角系Ⅱ式）は中期前葉（5世紀前葉）に位置づけられている。

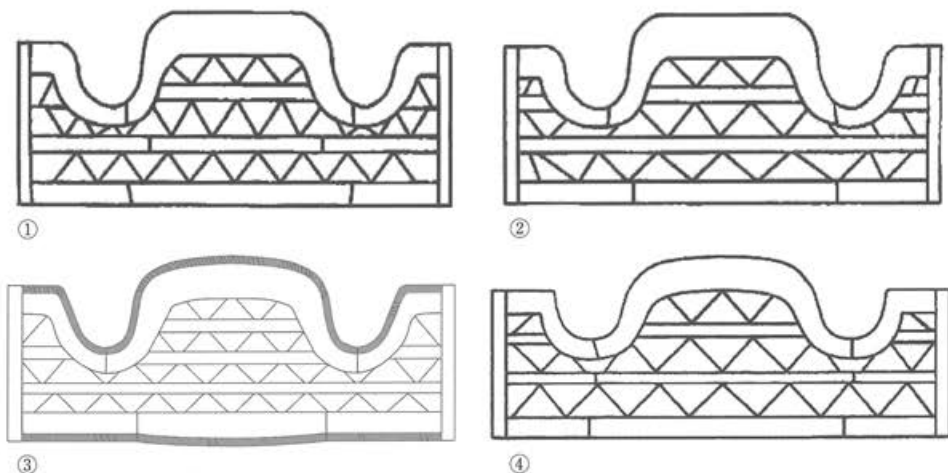
等角系から鈍角系への変化にともない三角板地板が大型化し、その数量も減少する。これにより製作技術が安定化し、本格的な量産体制に入ったとみられる。その変化の時期は5世紀前葉とされている¹¹。

野幕古墳の冑は、短甲と同じく三角板革綴式の衝角付冑で、板鋳と頬当が付属する（第8図）。板鋳は冑の後部に付いて首の後ろを保護するものであるが、比較的幅の広い1枚の鉄板から、数枚の細い鉄板を重ねた型式へと変化する。野幕古墳の冑には1枚の板鋳が付属しており、板鋳の縁には革組覆輪を取り付けている。冑本体が革綴という点、1枚で作られた板鋳の構造、板鋳の縁に革組覆輪を取り付ける点などを考慮すれば、短甲と同時期と考えてよい。衝角付冑に頬当が付く例は日本でも非常に珍しく注目される。

日本では甲冑の副葬位置は、古墳時代前期には被葬者の頭上、中期には足元と配置が変化することが指摘されており、こうした配置方法は古墳時代中期の百舌鳥・古市古墳群を中心とする倭王権によって成立し、拡散したと考えられている¹²。野幕古墳とペノリ古墳はこのような配置方法をそのまま受け継いでいる（第9図）。

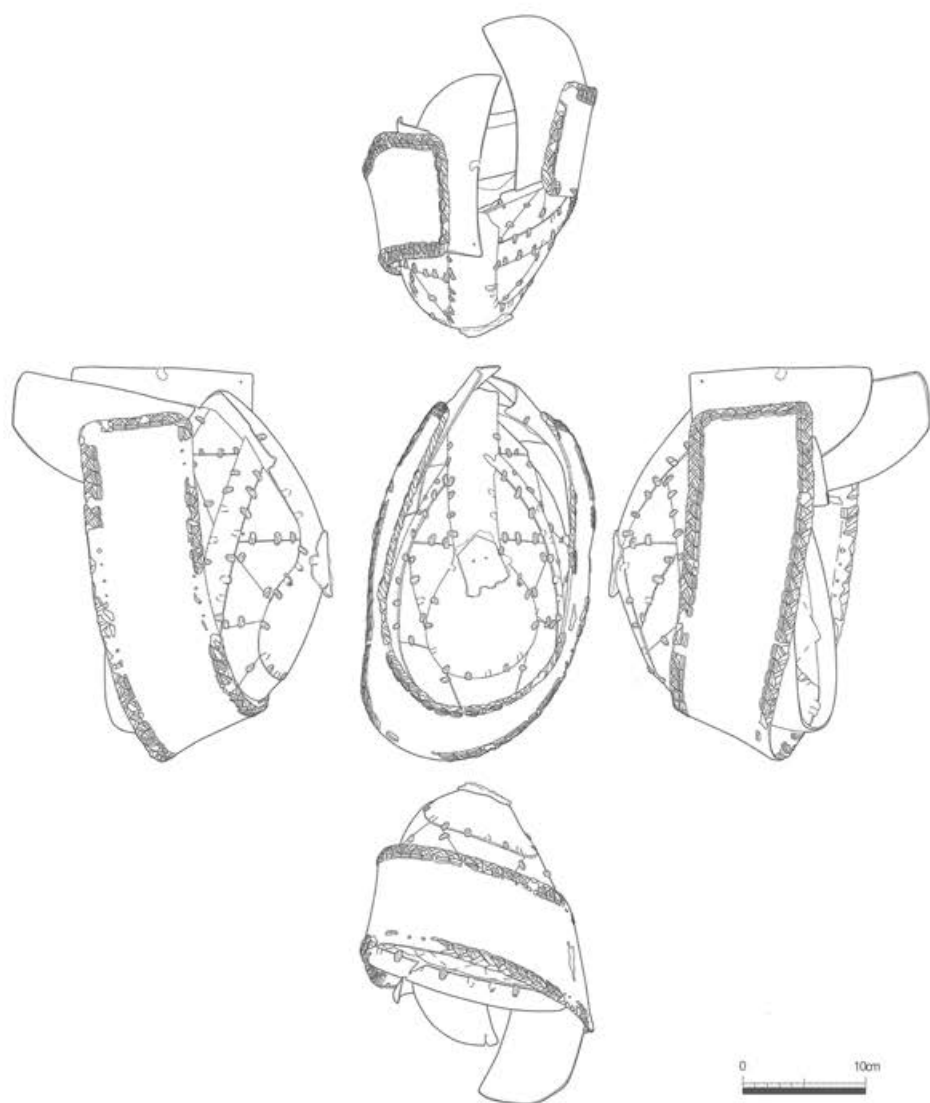


日本の古墳時代中期を中心とした甲冑と鉄鍔の変遷



①大塚越古墳 ②向山1号墳 ③野幕古墳 ④谷内21号墳

第7図 日本の古墳時代中期における甲冑の変遷と野幕古墳出土短甲との比較

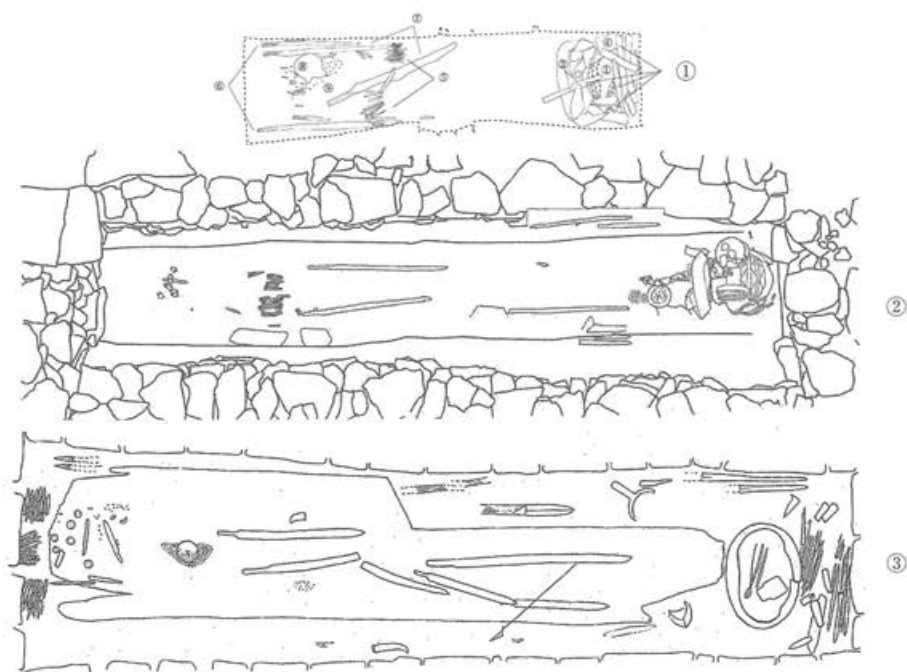


第8図 野幕古墳出土青

2. 鉄鏃と農工具

1) 鉄鏃

鉄鏃は被葬者足元側の副葬空間、甲冑の周辺から束の状態で出土した。また、被葬者頭部側の石槨短辺の片隅に突き立てられた状態で出土したものもある。この鉄鏃の形式は、柳葉形・柳葉腸挾形・菱形・圭頭形・鑿頭形（方頭式）、そして装飾性の強い無頸式腸挾形に分類される。韓国と日本に共通する菱形鉄鏃を除けば、すべて日本の古墳時代中期の鉄鏃形式である（第10図）。鑿頭形（方頭式）と無頸式腸挾形は被葬者頭部側の石槨短辺で出



第9図 主体部内の副葬品配置の比較
①新安 ペノリ古墳 ②兵庫県 小野王塚古墳 ③岡山県 随庵古墳

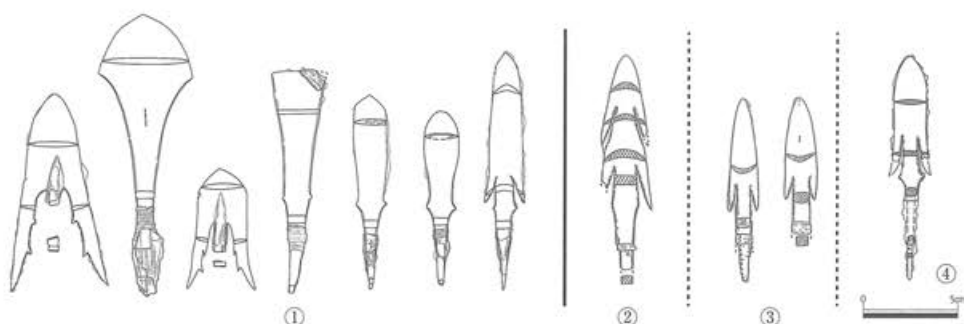
土し、その他はすべて甲冑の周辺で出土している。

柳葉形は、いわゆる鳥舌鏃と呼ばれるもので、鏃身側縁が「S」字形の曲線をなしており、関部が突出した形態である。日本の古墳時代中期初頭に現われ、中葉には消滅する。柳葉腸挾形は鏃身の下端部に腸挾（逆刺）があるもので、柳葉形（鳥舌鏃）と同じく関部が突出する。韓国にも類似した形態はあるが、関部が突出するのは倭系の特徴である。鏃身部断面形が三日月のようにへこむものと、中央がレンズのようにふくらむものに分類されるが、野幕古墳の出土品は前者の形態である。断面形がへこむものが早い段階のものであり、大阪府和泉黄金塚古墳、茨城県北椎尾天神塚古墳などの出土品にみられ、断面形がレンズ状のものは、静岡県五ヶ山B2号墳、東京都野毛大塚古墳などで確認される。圭頭形鉄鏃は、柳葉形と同じく鏃身下端の関部が突出し、鏃の先端が圭頭形をなす。

このように野幕古墳の鉄鏃形式は倭系であり、5世紀前葉の日本の古墳に類例が認められる。また、5世紀中葉に出現する長頸鏃が見当たらないことから、先述した甲冑と時期的な差はないものとみられる。

2) 農工具

野幕古墳から出土した農工具は、鉄鎌・鉄鋤・刀子などであるが、すべてが石槨の外側



第10図 野幕古墳出土の倭系鉄鎌と日本の鉄鎌

①野幕古墳 ②大阪府 和泉黄金塚古墳 ③茨城県 北椎尾天神塚古墳 ④静岡県 五ヶ山B2号墳

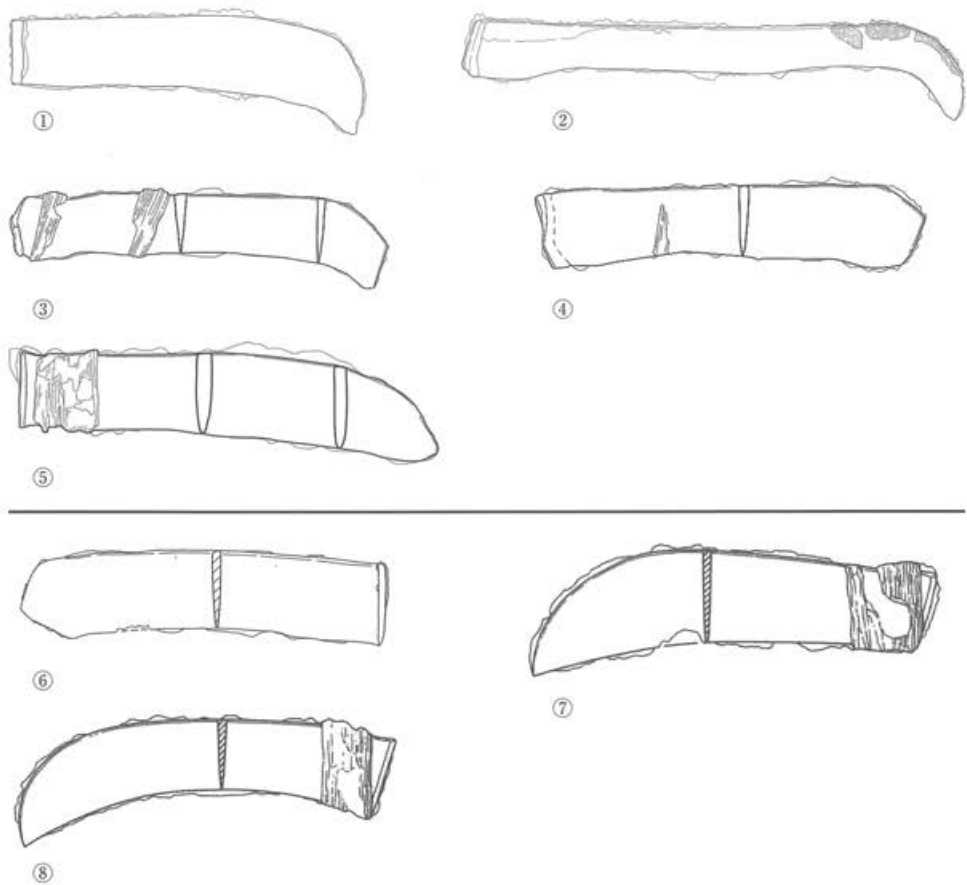
に詰められた裏込め石の上から出土している。鉄鋤と刀子の形式は日韓で大差ないが、鉄鎌は韓国より日本の出土品と類似する。日本の鉄鎌の形態は、古墳時代前期には長方形の直刃鎌であるが、中期になると韓国の曲刃鎌の影響を受けて鎌の先端が尖り、刃部が曲線形に変化する。このような変化は古墳時代中期初頭に始まり、中葉には曲刃鎌が直刃鎌に代替されるが、野幕古墳の鉄鎌は中期初頭から前葉にみられる過渡期の形態である（第11図）。同じ高興地域の、5世紀前葉と推定される東江面掌徳里古墳の鉄鎌と明らかに違うことも注意される。

3. 銅鏡と甲冑

野幕古墳で出土した銅鏡は、位至三公鏡（直径10.0cm）と素文鏡（直径6.5cm）の2点である。位至三公鏡の鏡背には「位至三公」という銘文と龍文が配されており、西晋時代に主に洛陽を中心に製作されたものである。「位至三公」という銘文が意味するのは、高い官職に就くことを祈願するもので、中国では吉祥句として秦・漢代から認められる。主な吉祥句としては、「位至三公」、「君宜高官」、「長宜子孫」、「寿如金石」などがあり、高い官職（位至三公、君宜高官）、子孫繁栄（長宜子孫）、無病長寿（寿如金石）などを願うものである¹³。

位至三公鏡は、韓国では慶州校洞出土品が唯一であるが、日本では古墳の副葬品として北部九州地域から13点、大阪府で6点、そして瀬戸内海沿岸の香川県、山口県、岡山県などから各1点、島根県で1点、その他の出土地未詳などの6点を含めて合計29点の出土事例が報告されている¹⁴。また、素文鏡と位至三公鏡が共伴する事例は、大阪府カトンボ山古墳でみられる¹⁵。

銅鏡と、甲冑を含むほかの副葬品との間には、しばしば相当な時期差が認められる。日本の古墳時代中期には、甲冑と古い時期の銅鏡が共伴する事例が一般的に認められる。特に、位至三公鏡と同じ生産段階の中国鏡は革綴の帶金式甲冑と一緒に副葬される場合が多い¹⁶（第3表）。



第11図 野幕古墳出土の鉄鎌と日韓出土の類例

①・②高興塚遺跡 ③～⑤野幕古墳 ⑥福岡県 老司古墳 ⑦・⑧静岡県 五ヶ山B2号墳

野幕古墳にみられる銅鏡と甲冑の共伴は、日本の古墳時代中期の副葬慣習に沿うものである。高興地域の吉頭里雁洞古墳と、新安ベノリ古墳でも同じように帯金式甲冑と銅鏡・鉄鏡と一緒に副葬されている。

V. 5世紀における倭の情勢と北東アジアの沿岸航路

日本の古墳時代に政治的統合がなされた背景には、鉄資源を中心とした先進文物を入手するルートの支配権をめぐる戦いがあったとされる。3世紀中葉、鉄資源を含む先進文物や情報の共同入手機構として「倭政権」が成立し、その盟主である畿内の「倭王権」は各地の政治勢力から外交権を委任される代りに、鉄資源などの安定的な確保と分配の責を負った。また、4・5世紀に日本列島に流入した甲冑や馬具など新しい鉄器や金銅製品など

第3表 日本の古墳時代の甲冑と銅鏡の共伴状況

鏡生産段階							備考
中国鏡	漢鏡	三国 西晋鏡			南北朝鏡		
倭鏡			第1期	第2期		第3期	
小札革綴冑	7	85	2 (3)				三重県石山古墳・京都府瓦谷1号墳を含む
竖矧板革綴短甲	3	11	2				
方形板革綴短甲	3	12	6				京都府瓦谷1号墳を含む
帯金式甲冑 (革綴のみ)	10 (4)	16 (10)	29 (15)	6 (1)			三重県石山古墳を含む
帯金式甲冑 (革綴・鉄留 共伴)	1	5	8 (4)	13			奈良県五条猫塚古墳を含む
帯金式甲冑 (鉄留のみ)	3 (1)	6	17 (2)	13 (6)	17 (2)	24	熊本県江田船山古墳を含む
帯金式甲冑 (鉄留) と挂甲共伴			2	2	4	3 (1)	
小札甲	6	3	4	4	14	24	

の金属加工技術を掌握することで倭王権の権力を強めたとされている¹⁷。百舌鳥・古市古墳群に甲冑など鉄製武器や武具の副葬が爆発的に増えるのもこの時期である。

日本列島に馬が導入された時期は、轡などの馬具を通じて把握することができる¹⁸。兵庫県行者塚古墳、福岡県池の上6号墳、熊本県八反原2号墳など、5世紀初頭の高墳で導入期の轡が確認されている。そして、その系譜が金海大成洞39号墳と清州鳳鳴洞A-76号墳・C-9号墳の出土品に求められることが指摘されている¹⁹。

日本列島において轡などの馬具は、5世紀初頭に九州と畿内を中心に導入されたが、5世紀前葉には東日本の長野県、5世紀中葉になると東北地方の宮城県に至るまで、日本列島各地に急速に拡散する²⁰。

こうした状況から、古墳時代中期の地方勢力にとって、馬具に象徴される騎馬文化に対する需要がどの程度のものであったかをうかがうことができる。そしてその供給を担った倭王権は、韓半島との積極的な交渉を通じて物量を確保しようとしたと考えられる。その際の倭王権の交渉先については、先述のとおり初期馬具の系譜が伽耶地域と百済地域に求められることから多元的なルートが推定される。また、4世紀後半に、百済が馬2匹を倭王権に贈ったという日本書紀の記事を参考にとすると、5世紀初頭の日本列島への騎馬文化の導入は、韓半島南部の伽耶地域はもちろん、韓半島中西部地域との関係も示唆される。このようなこの時期の倭王権と韓半島の交渉を具体的に検討することで、韓半島西南海岸の沿岸一帯に倭系古墳が出現した背景が明らかとなる。

文献に現われる4世紀後半から5世紀における倭と百済、または、倭と中国との交流関係としては、卓淳国を通じた百済との通交開始、高句麗との軍事的緊張関係による百済と倭の七支刀外交、「倭五王」の中国南朝との冊封外交などがあげられる。また、列島から大陸に向かう航海上の重要地点である福岡県沖ノ島で、倭王権による海洋祭祀がおこなわれ

たのもこの時期である。

倭の交易路は、白村江の戦い（663年）への介入によって新羅との関係が悪化する以前は、対馬海峡（大韓海峡）を渡って韓半島の南海岸と西海岸を経由する沿岸航路であった。この地域の海上地理を詳しくみると、干満差が激しく、海岸線の複雑なりアス式海岸であるため航海が難しいことが分かる。麗水半島から新安郡までは沿岸に島が多いため海路が特に複雑で、島と陸地の間では強い潮流²¹が発生するため、もっとも険しい航路として知られている。この地域の沿岸航路を利用するためには現地の複雑な海上地理と潮水の流れを正確に把握することが重要で、航海成功の最大のカギとなる。これまで沿岸航路との関連が指摘されてきた倭系古墳がこの地域に集中しているのも、こうした状況を傍証するものといえる。

VI. 結論

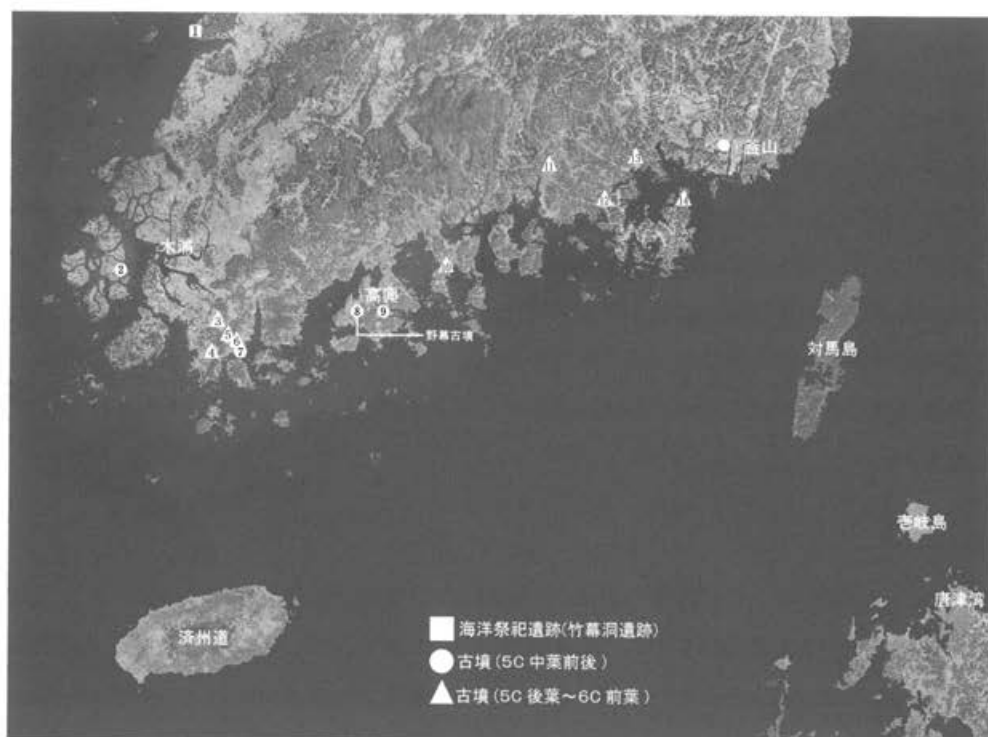
これまでの検討により、野幕古墳には5世紀前葉の倭系の副葬品が多く認められ、主体部も北部九州の影響を受けていたことが確認された。それでは、野幕古墳の被葬者はどのような人物だったのだろうか。一般的に、埋葬の慣習においては保守的な性向が強いことを考慮すると、在地の要素が薄く、相対的に外来的要素が高いこの古墳の被葬者は、外人、すなわち倭人である可能性が考えられる。

韓半島で発見される一連の倭系古墳の被葬者については、その立地や周辺の在地古墳群との関係、そして当時の政治社会的な状況から、在地首長説、倭系百濟官僚説、倭人傭兵説など諸説が提起されてきた。しかし、野幕古墳を含む沿岸航路沿いの地域から発見される倭系古墳については、それとは別の観点から考察する必要があると思われる。

釜山から新安郡に至る沿岸一帯では14基の倭系古墳が確認されている²²（第12図）。そのなかで、5世紀前葉から中葉の革綴式甲冑が出土したのは金海栗下B-1号墳²³、高興雁洞古墳、野幕古墳、海南外島古墳、新安ベノリ古墳の5ヶ所である。高興雁洞古墳以外はすべて5世紀前葉に築造されており、主体部も北部九州の石棺系竪穴式石室と類似する。特に、主体部の副葬品の状況全体が明確になった野幕古墳とベノリ古墳は、鏡や甲冑など副葬品の構成と配置がほぼ同じである。

西欧学界の理論によると、古代から近代に至るまで国際的な交易の場（Places of Foreign Trade）では政治的中立性、すなわち、交易のための居留外人（Trade Diaspora）の居住と活動が保証されることが普遍的であるという。また、このような交易場は、在地の拠点地域から少し離れた空間に形成されたようである²⁴。

金海栗下B-1号墳と金海官洞里の船着場遺跡²⁵は、そうした状況に該当する。当時の政治勢力の拠点地域であった金海大成洞や鳳凰洞から一定の距離を保ち、その立地は船の



第 12 図 韓半島西南海岸沿岸の倭系古墳の分布

1. 扶安竹幕洞遺跡 2. 新安ベノリ古墳 3. 海南龍頭里古墳 4. 海南造山古墳 5. 海南長鼓峰古墳 6. 海南新月里古墳 7. 海南外島古墳 8. 高興野幕古墳 9. 高興吉頭里雁洞古墳 10. 麗水竹林里車洞古墳 11. 泗川船津里古墳 12. 固城松鶴洞古墳 13. 馬山大坪里M1号墳 14. 巨濟長木古墳

接岸と寄港に適した条件を備えている。

特別な接岸施設を備えることができなかった古代においては、内陸へ深く入った湾は船の接岸と寄港に最適の条件を備えていた。高興湾の背後に位置する野幕古墳も、このような立地条件を満たしているといえる。

高興地域の古墳分布をみると、高興北側の東江面と、雁洞古墳が位置する海倉湾背後の道化面一帯に集中している。道化面の古墳は、地表調査によれば、石室や石槨を主体部とする古墳と推定されている。東江面一帯の古墳は、発掘調査を通じ、その時期や性格がある程度明らかになっており、4～5世紀代の梯形（長台形）の周溝をもち、木槨を主体部にした多葬墓であることなどが確認されている。出土遺物は、小伽耶、阿羅伽耶などでは伽耶系土器が多数副葬されている。また、東江面簞洞遺跡²⁶では、ヒスイ製勾玉が首飾りとして副葬されていることが確認された。その葬法は汎栄山江流域文化圏に属し、出土遺物を通じて釜山、金海などの伽耶勢力や倭との交易をうかがうことができる。このように野幕古墳と同じ時期の在地勢力は、東江面一帯を拠点にしていたと推定される。これに対し野幕古墳は、在地勢力とは一定の距離をもった浦港に居住していた倭人集団に関わるも

のと推定される。

高興雁洞古墳は、野幕古墳の反対側である浦頭面吉頭里海倉湾の背後に位置する。雁洞古墳の立地、葬法、出土遺物をみると、その被葬者は野幕古墳と同じく居留倭人の集団と推定される。ただし、時期的には野幕古墳より遅く、5世紀中葉頃と考えられる²⁷。釜山から西海岸へと至る沿岸地域の中で野幕古墳が立地する高興湾一帯は、航路の進行方向から逆向きになる場所であることから、寄港地としては最適の条件とはいえない。むしろ雁洞古墳が立地した海倉湾一帯が航路上の進行方向に位置しており、より適しているといえる。野幕古墳と関わりのある居留倭人は、当初は海倉湾を希望したかも知れないが、在地勢力の了承を得ることができなかったため、仕方なく高興湾の一帯を選び、その後、在地勢力の了承のもと雁洞古墳が所在する海倉湾へ移った可能性を想定しておきたい。

5世紀に畿内を中心とした倭王権は、鉄、馬、金工品などを日本列島全域の地域勢力へ分配・供給し支配権を強めていったと思われる。この供給拡大により、それまでの韓半島南部に依存していた供給地を韓半島の西南部と中西部に広げ、また、それにともない安全な航路の開拓が必要となったものと推測される。そのため、最も航海が困難な麗水半島から新安郡に至る航路沿いに位置する高興、海南、新安地域に交易船を寄港させ、航路の案内をする倭人を派遣していたと推定される。その被葬者については、先述した主体部の系譜が北部九州地域と関わりがあることや、帯金式甲冑の生産と配布が倭王権において一元的におこなわれていたことなどから²⁸、九州を出自に持ち、倭王権の影響下にあった人物と想定される。

註

- 1 本稿では、葦石や主体部、出土遺物などから倭との関連性が明らかになった古墳を暫定的に「倭系古墳」とよぶ。
- 2 国立羅州文化財研究所『高興 野幕古墳 発掘調査報告書』2014年。以下、野幕古墳の調査成果については本報告書による。
- 3 木槨の存在を認めるとすれば、野幕古墳の主体部は、嶺南地域でみられる石囲式木槨といえよう。しかしながら、嶺南地域の石囲式木槨に比べ、壁体の石材が比較的整然と積み上げられ、裏込め石も丁寧に敷き詰められている。築造の順序からすれば石囲式と分類することもできるが、この構造は嶺南地域の石囲いとは明確な違いがあり、ここでは暫定的に木槨と石槨という二重槨の構造としておく。
- 4 重藤輝行「埋葬施設－その変化と階層性・地域性－」『九州における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表資料集、九州前方後円墳研究会、2007年。
- 5 発掘調査の過程において蓋石は確認されなかったが、盗掘によって攪乱した墳丘の斜面から確認された2枚の石材が蓋石と考えられるという（大野城市教育委員会『笹原古墳』大野城市文化財調査報告書第15集、1985年）。しかしながら、盗掘によって失われた石槨短辺などの壁体に使われた石材である可能性も排除できない。

- 6 金赫中がまとめた23件の資料（金赫中「韓半島 出土 倭系 甲冑의 分布와 意味」『中央考古研究』제8호、中央文化財研究院、2011年）に、靈岩沃野里方台形古墳第1号墳（国立羅州文化財研究所『靈岩 沃野里 方台形古墳 第1号墳 発掘調査報告書』2012年）と、新安郡安佐面ベノリ古墳（東新大学文化博物館『安佐面 邑洞古墳 및 배널리古墳 発掘調査 現場説明会資料』2011年）から出土した三角板革綴短甲が追加される。
- 7 橋本達也が集成した日本の古墳時代中期における甲冑635件（橋本達也「古墳時代甲冑研究の現状」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集、2012年、pp.574-582）から小札甲を除いた数である。
- 8 宋桂鉉「加耶古墳の甲冑の変化と韓日関係」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集、国立歴史民俗博物館、2004年。
- 9 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」『史林』第81巻第5号、1998年。
- 10 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」（前掲註9）。
- 11 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」（前掲註9）。
- 12 橋本達也「野毛大塚古墳出土甲冑の意義」『野毛大塚古墳』1999年。
- 13 王仲殊『三角縁神獸鏡の謎』角川書店、1985年。
- 14 「魏志倭人伝を読む 卑弥呼のもらった鏡」邪馬台国の会 第236回 講演会資料、2005年。（<http://yamatai.cside.com/katudou/kiroku236.htm>）
- 15 古代学研究会『カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第一冊、1953年。
- 16 上野祥史「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集、国立歴史民俗博物館、2012年。
- 17 白石太一郎「鉄とヤマト王権」『鉄とヤマト王権－邪馬台国から百舌鳥・古市古墳群の時代へ－』大阪府立近つ飛鳥博物館、2010年。
- 18 轡は、騎馬や馬を操る上で必須の馬具で、轡の存在は、すなわち馬の存在を証明することになる。日本には元々野生馬が存在しなかったため、轡などの馬具が現れる時期そのものが日本列島に馬が導入された時期になる。また、その馬具の系譜がどこに求められるかによって日本が韓半島のどの勢力と交渉をおこない導入したかが分かる。
- 19 諫早直人「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表資料集、九州前方後円墳研究会、2012年。
- 20 諫早直人『海を渡った騎馬文化』風響社、2010年。
- 21 この地域の島と沿岸の間で形成された海峡の潮流は、平均して3～5kn（1kn=1.852km/h）であり、最も激しいところは12knである（大韓民国水路局『韓国沿岸水路誌』第2巻南海岸編、1988年）。
- 22 金海栗下B-1号墳、巨濟長木古墳、馬山大坪里M1号墳、固城松鶴洞古墳、泗川船津里古墳、麗水竹林里車洞古墳、高興雁洞古墳、高興野幕古墳、海南外島古墳、海南新月里古墳、海南長鼓峰古墳、海南造山古墳、海南龍頭里古墳、新安ベノリ古墳である。
- 23 金海栗下B-1号墳からは、三角板革綴甲の破片と烏舌鏃、逆刺がある刀子形鉄鏃などが確認された。報告書では、三角板革綴甲と主体部の構造などをあげて5世紀中・後葉とみているが、出土した遺物すべてが倭系であることから日本の編年体系を基準にして5世紀前葉とみるのが妥当と思われる。また、主体部の構造も北部九州の石棺系竪穴式石室であり、墳丘上に散在する石材も外護列石ではなく葺石である可能性が高い。野幕古墳と同じく墓の構造、主体部、出土遺物のすべてが倭系である（慶南発展研究院 歴史文化센터『金海 栗下里 遺蹟Ⅰ』2008年）。
- 24 김창석「古代 交易場 의 中立性 과 連盟 의 成立 - 3 ~ 4 世紀 伽耶 連盟 体系 를 中心 으로 -」『歴史学報』216号、2012年。

- 25 三江文化財研究院『金海 官洞里 三国時代 津址』2009年。
- 26 大韓文化遺産研究센터『高興 掌德里 獐洞遺蹟』2011年。
- 27 金榮珉は、雁洞古墳の年代を5世紀末の政治的状況と結び付けて、副葬品の編年より少し遅い5世紀末としているが、被葬者が交易に携わる居留倭人であるならば、副葬品の編年より遅くする必要はないように思われる（金榮珉「高興 吉頭里 雁洞古墳의 갑옷과 투구」『高興 吉頭里 雁洞古墳의 歴史的 性格』全南大学校博物館、2011年）
- 28 橋本達也「倭王の武装」『漆黒の武具・白銀の武器』第3回百舌鳥古墳群講演会発表資料集、堺市、2012年。

参考文献

- 慶南發展研究院 歴史文化센터『馬山 鎮北 大坪里遺蹟』2011年。
- 金洛中「韓半島から見た九州勢力との交流」『沖ノ島祭祀と九州勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表資料集、九州前方後円墳研究会、2012年。
- 金鉉求 외『日本書紀 韓国関係記事 研究（Ⅰ）』一志社、2002年。
- 禹炳喆「鉄鍬과 鉄矛로 본 新羅, 加耶 그리고 倭」『嶺南考古学』47号、嶺南考古学会、2008年。
- 河承哲「巨濟 長木古墳에 대한 一考察」『巨濟 長木古墳』慶南發展研究院 歴史文化센터、2006年。
- 浅羽町教育委員会『五ヶ山B2号墳』1999年。
- 小矢部市教育委員会『谷内21号墳』1992年。
- 近藤厚樹「縄文時代の装身具」かながわ考古学財団入門講座発表資料、2009年。
- 総社市教育委員会『随庵古墳』1965年。
- 中川正人「櫛の造形－弥生時代の飾り櫛－」『紀要』第12号、滋賀県文化財保護協会、1999年。
- 福岡市教育委員会『老司古墳』1989年。

挿図、表出典

- 第4図 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」（註9文献）。
- 第7図 橋本達也「倭王の武装」（註28文献）。鈴木一有「百舌鳥古墳群の武器武具に見る特質」『漆黒の武具・白銀の武器』第3回百舌鳥古墳群講演会発表資料集、堺市、2012年。阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」（註9文献）。
- 第10図②、③ 田中新史「古墳時代中期前半の鉄鍬（一）」『古代探叢Ⅳ』－滝口宏先生追悼考古学論集－、滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会、早稲田大学所沢校地蔵文化財調査室編、早稲田大学出版部、1995年。
- 第3表 上野祥史「帶金式甲冑と鏡の副葬」（註16文献）。
- 第12図、第1・2表 筆者作成。
- その他の挿図は各報文より転載。

고흥 야막고분을 통해 본 5세기 대외교섭

권택장

요지 야막고분을 비롯하여 한반도 서남해안의 연안항로를 따라 왜계 유물이나 葬法이 채용된 고분의 사례가 집중하고 있다. 지금까지 왜계고분에 대해서는 재지수장설, 왜인용병설, 왜계백제관료설 등이 주장되고 있는데, 야막고분과 같이 연안항로상에서 발견되는 왜계고분들은 그 배경과 성격이 내륙의 거점지역에서 발견되는 왜계고분과는 다를 것으로 본다.

부산에서 신안군까지 연안항로상에서 확인된 왜계 고분은 14기 정도 된다. 그 중에서 5세기 전엽에서 중엽의 시기에 혁절식 갑주가 출토되는 곳은 김해 읍하 B-1호분, 고흥 안동고분, 야막고분, 해남 외도고분, 신안 배널리고분 등 5곳이다. 고흥 안동고분을 제외하고는 모두 5세기 전엽에 해당하며, 매장주체부도 북구주의 석관계수혈식석실과 비교된다. 특히 매장주체부 내 유물 부장양상의 전모가 확인된 야막고분과 배널리고분은 鏡과 갑주 등 유물의 구성과 배치가 거의 유사하다.

5세기 대 기내를 중심으로 한 왜 왕권은 일본 열도의 철과 말, 금공품에 대한 공급확대를 통해 일본열도 전역의 지역 세력에 분배하면서 열도 내의 지배권을 강화해 나갔을 것이다. 이러한 공급확대는 기존 한반도 남부에 의존하던 공급지를 한반도 서남부와 중서부로 다변화하면서 안전한 항로개척이 필요했을 것이다. 그래서 항해가 가장 어려운 여수반도에서 신안군에 이르는 구간에 해당하는 고흥과 해남, 신안 지역에 交易船의 寄港과 導船의 역할을 담당하는 왜인을 파견하였을 것으로 추정된다. 그리고 그 출자는 앞서 살핀 매장주체부의 계보가 구주지역과 관련된 점, 帶金式甲冑의 생산과 배포가 왜 왕권에서 一元적으로 이루어진다는 것을 참고하면, 구주에 출자를 두고 왜 왕권의 영향하에 있었던 것으로 볼 수 있다.

주제어 : 왜계 고분, 연안항로, 삼각관혁철관갑, 충각부주

International Relationship in the 5th Century CE: Based on Yamak Tomb in Goheung

Kwon Taek-jang

Abstract: Recently many tombs containing Japanese-style burial goods and adopting Japanese-style tomb structure have been found in southwest seashore in the Korean peninsula along coastal route. Many theories to tomb occupants of these burials, which include local rulers, Japanese mercenaries, Wa (Japan) related Baekje officials, have been presented. The background and characteristics of the Japanese-style tombs found in coastal routes, such as Yamak Tomb, might be different from those distributed in inland lodgment points.

About 14 Japanese-style tombs are investigated in coastal route ranging from Busan to Sinan. Among them, five tombs, which include Tomb No. B-1 at Yulha in Gimhae, Yamak and Andong Tombs in Goheung, Woedo Tomb in Haenam, Baeneolri Tomb in Sinan, contain lamellar armor dated from the early to mid-5th century CE. Except armor found in Andong Tomb in Goheung, those uncovered from other four burials were produced in the early 5th century CE. Moreover, burial structures of these four tombs are similar with those of stone-cist-style stone chamber in North Kyushu. Particularly, types and distribution patterns of grave goods, such as bronze mirrors and armors, of Yamak Tomb and Baeneolri Tomb show very similar pattern with those of burials in North Kyushu.

In the 5th century CE, the kingship centered in Kinai reinforced its power into the entire region of the Japanese archipelago by distributing iron goods, horses, and prestige goods made from gold into local rulers. In order to maintain stable supply of these prestige goods, the central power in Kinai might diversify supply center from the southern peninsula to the south western and mid-western peninsula, and need to open safe coastal route. Therefore, it is supposed that the Japanese authority dispatched its officials who operated calling trade ships into ports located in most difficult voyage zone between the Yeosu peninsula and Sinan. Considering that burials structures of these areas are similar with those in Kyushu and production and distribution of armors were controlled by the authority in Kinai, occupants of these tombs were dispatched from authority of Kyushu under the influence of the central power.

Keywords: Japanese-style tombs, coastal route, triangular iron plate armors, iron helmets